

専門は生命倫理学、生命倫理学史。

主に「尊厳ある死」の言説の編成過程について、メディア、法、医療、ホスピス運動／法制化運動／障害者・患者運動、文学・映画・演劇表象など、多元的な現代史研究を行っている。研究過程で生命倫理学・死生学の成立史、日本への導入史に関心を持つようになり、学内外で共同研究をおこなっている。本学人間科学研究所と先端総合学術研究科のGCOE「生存学」創成拠点の事業推進担当（セクションI：集積と考究）であり、ゼミ指導では同拠点との連携も射程に入れる。

### 1. 専門演習の目標

生死の問題は、理論的な思索や論証の対象にもなりえるが、同時に、誰もが自分自身の歴史のなかに織り込んで考えることのできるテーマである。問題から「自分」を棚上げせず、自身を問題に織り込んで考えながらも、そこに拘泥することなく、「自分らしくありたい」と希う自らをも突き放して観察の対象としながら、法制度や社会構造、歴史といった広汎で多元的・多角的な視点に開かれて学び探究することが、本ゼミの基本である。そのために、生命倫理学だけでなく、医療社会学、文化人類学、科学技術社会論や、社会福祉、障害学、ジェンダー論、子ども・若者論など、関連諸学・諸分野の知見を貪欲に取り入れ、「生・老・病・死」をめぐるやっかいで取り組みがいのある問題群の解釈と組み替えを、学生諸氏とともに試みたい。

### 2. 専門演習で扱う課題と内容

生命科学と先端医療の発達にともなう「生・老・病・死」の変容は、クローニングや生殖医療技術、再生医療、脳死移植、安楽死・尊厳死、選択的中絶といった形で主題化され、生命倫理学と死生学という、1960年代から1970年代にアメリカ合衆国を中心とする米英英語圏で成立した学際的なディシプリンによって問題化されてきた。メディアでもしばしば取り上げられているこれらの問題群は、「新しい生命倫理」や「患者主体の医療」といった言辞とともに、映画やTVドラマで語られる「物語」によって、より具体的でなじみ深いものにもなっている。

今日の「生・老・病・死」をめぐる問題群は、「(患者の)自己決定(自律)」の原理と「自分らしい性と生と死」という語りを基底にしており、生命倫理学・死生学の成立が、同時期の「新しい社会運動」の潮流と無縁ではないことを示している。しかし、「自分らしさ」の希求が、質によって生命を序列づけ、質が低いと見なす／見なされる生命は生まれなくても、死にゆかせても「やむを得ない」もの、という語りに収斂していることを考えれば、生命倫理学・死生学の語りの構造、「生・老・病・死」を主題とする文学・映画・演劇・漫画などが表象する「いのち」のありよう、それ自体を批判的に読み解き、検証する必要がある。と、同時に、「自分らしさ」とは何なのか、「自分らしさ」の希求が、自他の関係性にお

いてどのような意味を持つのか、どのような「装置」となって立ち現れているのか、親密圏・公共圏双方から問い直すこともなされねばならない。

### 3. 授業の進め方・内容

3 回生前期：担当者からの問題提起と文献購読を中心にすすめる。基礎的な文献を読解してレジュメを切り、自分の言葉で報告や討論、レポート作成を行う基礎的なスキルの修得をめざす。

3 回生後期：各自の関心に沿ったテーマの選定、研究計画、中間報告、レポート作成を通してスキルをあげていく。

4 回生：卒業論文のための調査研究と執筆。

### 4. 必要とする知識

文献に取り組んでいくための基本的な読解力、報告し対話するための表現力。

一般論だが相当数の学生がこの基本的能力に欠けている。これを自覚した上で立ち向かっていく意欲を求める。

### 5. 関連する分野・科目・知識

医療社会学、医療人類学、社会福祉学、障害学、ジェンダー論、科学技術社会論、宗教学など

### 6. テキスト・参考書・機材（受講生が標準的に持つもの）

玉井真理子・大谷いづみ編『生命倫理(仮)』有斐閣(2010年末頃刊行予定)。他に、生命倫理教育研究協議会編1999『テーマ30生命倫理』教育出版、香川知晶2009『命は誰のものか』ディスカバリー21。

### 7. 独自に付加する選考方法

面接を行うことがあります。

できる限りガイダンスには出席してください。

### 8. 受講生に望むこと

本を読めるように、文を書けるようになってください。言語力は思考力の礎です。

就活と卒業研究を両立する気概を。